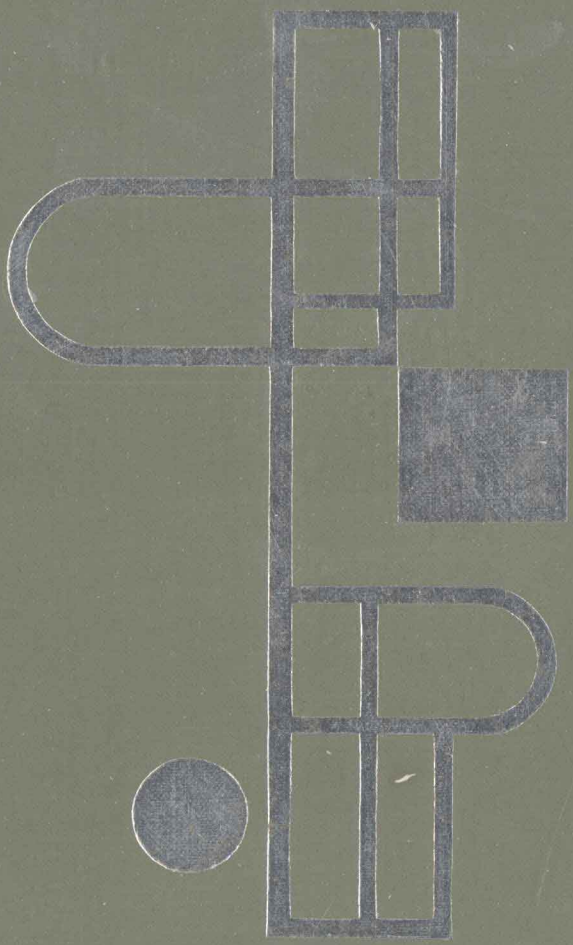
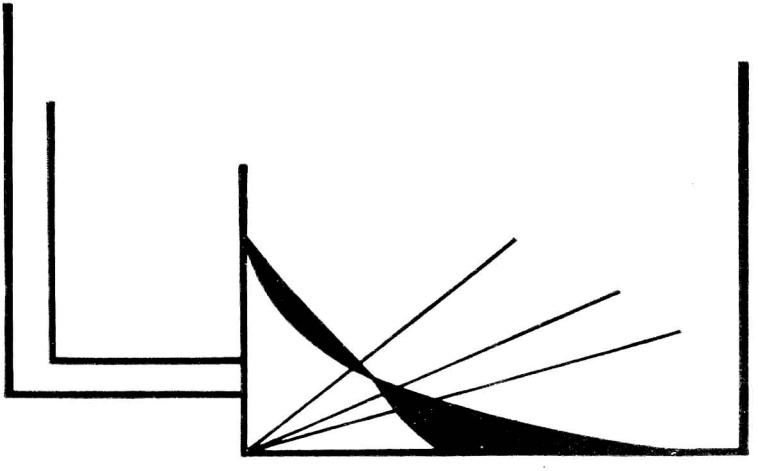


幸田文集

新選 現代日本文學全集

12



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 12

幸田文集

昭和三十五年五月十五日 発行

著者 幸田文

発行者 東京都千代田区神田小川町二ノ八 古田晁

印刷者 東京都青梅市根ケ布三八五 山田一雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八 筑摩書房

〔電話〕東京 三三局(291)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製本 株式会社高陽堂 印刷 株式会社精興社 整版 株式会社精

幸田　文集　目次

みそつかす……五
草の花……五九
糞土の墻……九七
あとみよそわか……一一〇
おとうと……一三〇
父……二二五
ちぎれ雲……二四九
斎藤先生三題……二九五
一葉さん二題……三〇一
勲　章……三〇三
姦　声……三〇八

黒い裾……三五
雛……三五
笛……三二
流れる……三四
幸田文について……山本健吉　四四
解説……小松伸六　四九

装幀　恩地孝四郎
恩地邦郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幸田文集

はじまり

明治三十七年九月一日。暴風雨のさなかに私が生れたという。命名の書にはただ文とだけ。第一子は母体を離れぬうちに空しくなつたが、これは男子であつたそうな。位牌には夢幻童子とあつた。第二子は女、歌という。父は三子に男を欲していたという。そこへ私が出て来たのである。

恵まれた子を喜ばぬということは勿論あり得ないけれど、男子を待ち望んだ心には当外れの淋しさがあつたのだろう。産褥の枕もとから立ちあがる父と入れかわりに、葛湯をすすめに行つた下婢おもとは、母がほろほろと涙を流しているのを見、「女だつて好い児になれ、女だつて好い児になれ」とくりかえしているのを聞いたという。お産に疲れて敏感になつた女心が、すぐに父の張りあいない淋しさを映して、続けて女の子を二人産んだという理由のない間のわるさに涙を落したものでもあろうか、あわれに思いやられる。

長女は綺麗な子であつた。ふつさりした髪と弧を描く眉、黒い瞳、鼻と直角についた唇は笑うと特徴あるかしぎかたをする。生れたばかりのときは誰もそう美しいものではないが、私はことさらに美しくなかつたそうである。赤茶けたうす色の髪は薄く、眼窩大きく寸づまりの鼻に、泣きわめく口は無のようであつたといわれる。美しいものを喜ぶ父がこの芳しからぬ子を見て、あるいは何か母に云つたかともおもえる。「いらないやつが生れて来た」と父がつぶやいたということを、やはりこのおもとから聞かされ、物心ついてから何十年の長い歳月を私はこのことばに閉じこめられ、寂寥と不平とひがみを道づれにした。臨終を数日後にして父は、輝きわたつて私を照らした。皎々たる光を浴びて呪うべきこの道づれはあとなく影を消し、陽のなかに遊ぶ裸身のおさな児のように私ははじめて歓喜し、円満であつた。姉や弟とともに私もまた愛子であつたのだ。この幸福な確信を形見に残してくれて、父は世を去つてしまつた。かたくなだつた私は、父の生命とひきかえのようにして、ようようすべての子は父の愛子であるということがわかつたのであつた。

私の生れたときに父は三十八歳、すでに一女を得ている。おのれの気魄を次代に貫きつがせたいその跡取り息子を望み求めたのは、世の人情のあたりまえである。何の業どの道を行くものにもせよ、おのれの筋金を伝えて世に問うものをもつた、毅然たる悴の姿を描いたのは無理からぬ壮年の思いであろうのに、与えられたものは姉に劣る数等の私であつたとしたら、いりもしないやつ云々のことばが駟もまた及ばぬ早さでひとの耳に駈けつけたとしても、これもまた無理ならぬ人情のゆくえである。人情の流れは、懐に抱けば舟もつなぎ波風も避ける。さからつた私に櫓にも骨折り櫂にも息づいたが、いまはおだやかにこのことを思つてみている。壮年三十八歳の元気に溢れた父と、しかと云つたか云わなかつたかわかりもしないこのことばとを、あたたかにわが懐に抱けばおのずから湧くものは微笑である。この私は裸で生れ落ちるが否や、あれほどの、父ほどの男を忌々しがらせたではないか。なんと生意気な、そして滑稽な文子。

姉は優にして父の愛を得、私は醜にして母のあわれみを蒙り、露伴家は進行する。三年して明治四十年、初午の太鼓のどかな春の昼、弟が生れた。父は勇みたつて祝杯を挙げたというし、母はほつとしたと人に語つたという。成豊、呼び名は一郎。命名の書には出典やら何やらがごたごた書きつけてあつた。待つものを得てきおつた父の心が読める。早春の陽ざしは障子に柔かだつたろう、梅が匂つていたろう。遠くにゆるやかな太鼓が聞える。杯を挙げて父は快く酔うている。別室の母は満足と疲労にうつらうつらしていたろう。この光景をおもうと、悲しいほどにもめでたい。多分、父の家庭の幸福は絶頂だつたと考えられる。

はは

七歳。母の死をもつて私の記憶は突如として、しかも鮮かにはじまる。あの午後、私達が小石川のおばあさんと呼んでいる父の母と、母の姉山室久子とが、申しあわせでもしてあつたように相ついで来あわせ、臥ている母の処へ代りばんこに出たりはいつたりした。時たまにしか来ない人であつたから物珍しかつた。お久伯母さんは手提袋から蜜柑を出して、私と弟に一ツずつくれ、自分は煙管を取りだして吸いつけた。おばあさんはなんとなく苦々しげにしているので、蜜柑は貰つたものの皮も剝きかねて立ちあがると、弟もついて来た。きょうだいは二人ながらに、この人達にちつとも親しみをもたなかつた。

おばあさんは顔面神経痛で、しょつ中顔半分がぴくぴく引きつれていて、こわかつた。そのうえ、しゃんとすわつて人を寄せつけないような威厳を示していたし、父ですらが言語・態度ともに第一公式を以てしていたから、云いようのない気ぶつせいさであつた。激しい物云いでもなく、むしろ穏かな様子であつたのに妙に一種の戦慄を受ける、ゆめにもあまつたれられるおばあさんではなかつた。容貌は美しくない。額の皺、大きな口、小さい切長な眼はきらりきらりとよく光つた。郡司伯父・父・延子叔母はあきらかに母親似である。

お久伯母さんは母のすぐ上の姉である。顔は母と似ていない。おでこで大きな眼がきょろきょろし、唇は紫色でとんがつていた。痩せた骨の上に皮がゆとりなく引つ張れてていかてかし、耳が薄く立つている。火形の相である。父はこの人を嫌つたこと甚しく、かつて云つた。「そりやきょうだいだから、おまえのおつかさんとは色んなところが似ていたさ。けれどもその心情にいたつてはまさに雪と墨、しぐさや声が似ているなりにその下等さ、趣のなさは我慢にもやりきれない」と。子供には心眼がある、まま的確に見る。姉も私も弟も、お久伯母さんをなんとなく好きでなかつた。母とまるで違うことばつき・挙動を蔑んでいた。

祖母・伯母・父の三人は夕方まで、ひそひそと客間で話していたが、おばあさんは俥に乗つて帰り、伯母さんは泊ることになつた。かわいそうなのは弟だつた。陽のあるうちはとにかくにちやほやされていたが、暗くなつて眠くなると同時に母を慕つて端的に伯母さんを嫌うのを、無理に抱かれて寝かされ、いつまでもぐずり泣きをし、とうとう泣き寐入りした。ならべて敷いた床にはいつて、私はむやみに弟がかわいそうで、自分も泣きだしたいように興奮したのを覚えている。姉はどうしたのか、ちつとも記憶に浮いて来ないのは不思議である。この日から病室に入ることは禁じられた。伯母さんはずつと泊りこむことにきまり、私達はもう伯母さんとは云わなくてオバ公と呼んだ。父もオバ公さんと云つた。

おばあさんは足繁く来るようになつた。私は萎縮して、なるべく庭に遊んでいようとした。お医者さまも繁々とやつて来た。手の足りないときには、蹴込に腰をかけている俥屋さんにお茶を持つて行く手つだいをさせられ、赤いお盆の上にはきまつて最中や鹿の子と渋茶一杯、煙草が載つていた。俥屋さんと友達になつた。お医者さまの俥には金の定紋が蒔絵にしてあつた。俥屋さんの法被には何々医院と染めてあるのだそうだ。俥屋さんはいろんなことを知つていた。どこの横丁には大きないやな犬がいること、土手の曲り角から何本目の松の木にはよく人がぶらさがつていること、あそこのおばあさんの病気は頭えの病気だの、団子屋の亭主の真田虫だの、話はおもしろいともおもしろかつたが、俥屋と中よしになる令嬢はないと云つて、おばあさんに叱られた。

そういう日々のある暮れがた、夕やけの井戸端で私と弟は喧嘩して、競つて泣いた。とめ手はなかなかあらわれなかつた。歌うように泣いていると、台処の油障子から女中が顔だけ出して、「奥さまがお呼びです」と云つた。たちまち泣くのをやめて、先を争つた。廊下でオバ公に行きあつて、「こーれ、静かに」と捉えられたが振りもぎつて、唐紙引きあけ飛びこむと、中はもう夜であつた。台ランプが薄葉の笠を着て、ほの明るくともつていた。

子供は天の啓示に敏感であつた。何事かはわ

からないが、なにか異常をさとつた。立つたまま見ると、母さんはいつもと違つていた。髪を変なふうにぎゆつと結えて、赤い顔だつた。「おすわり」と笑つて手を出して指し示し、私がその手につかまろうとするよりさきに母は手をひつこめ、夜着を眼の下まで引きあげた。敷布に手をついて母の上へのしかかつた。「もつと退つて」と蒲団をかぶつた声が遠いように聞えた。いざつて退つて、膝へ手を重ねた。「喧嘩しちやいけないのよ、ア子ちやんはねえさんだから我慢するのよ、坊やはおとなしく云うことを聞いてね。」母の眼からは次々に涙が湧きこぼれ、誘われて私も手の甲へぽたりと落ちた。弟が、「ア子ちやん泣いてんの」と訊いた。籠目に編んだランプの笠の一トこま一トこまが、ふくれたり縮んだりして涙の奥ににじんだ。それに気が移つた私は、指のさきで突いてみた。薄葉は拒みながら裂けた。「ああ」と聞え、はつとすると、「ア子ちやんあんた、それだから母さん心配になるのよ」と云われ、あわてて、「御免なさい」とあやまつた。

オバ公が吸いのみを持つてはいつて来た。「卵なら私のでもいいでしよ」とオバ公に訊いてから、母は枕もとの半熟を眼でくれた。持つて立とうとすると、「ア子ちやんちよつと待つて。そのランプの心をもつと大きくして頂戴」「これでいい?」返辞がなかつた。ふりかえると、母の眼はじつと見ていた。

夜遅くお医者さまが来た。俥屋を呼んで来いと云いつかつた。「お嬢さんいくつ? かわいそうになあ、おつかさまがいけなくつちやなあ」と云つた。ふむ? という気がしたが、夜の庭はしんとしてこわかつた。内玄関には、いつもの盆にお銚子と海苔がついていた。

四月八日、灌仏会。よい天気だつたと覚えている。親類が大勢来た。呼ばれて母の枕もとでお辞儀をさせられ、はじめてほんとうに亡くなつたという変なことを見た。弟は父に抱かれていた。垣根の裾に桜の吹き溜りができている日であつた。

家中は人だらけになつた。遊び場はなくなつた。弟は人の手から手に渡つていたし、姉はオバ公に何かやらされていた。私は一人うろうろし、誰かが髪を撫でて、「赤い毛ねえ」と云い、私はきつとした。台処とそれに続く内玄関には見馴れない棚が吊られて、膳・椀・皿小鉢が積まれ、おいしそうな物がいつぱいあつた。丹波屋の肥つた主人と若い衆が来ていて俎の前から、たつた七歳の私に手をついた。「なあに、奥さまが亡くなつたつて嬢つちやまは好い児だ」と云つた。若い衆が、「きんとんあげましよか?」「いらないつ」と言下にはねのけ、みんなが笑つた。「これだから丹波屋はこの嬢つちやまが一番贔屓なんだ。」親しくない誰かれより、私は丹波屋の方がよかつた。

きようだい三人は納戸で、おばあさんに着物を着かえさせてもらつた。黒紋附といえば体裁はいいが金巾である。袖と裾に黄と紫の菊の花の模様があるが、下等な捺染ぞめ、けばけばしい紫の金巾の裾まわし、白金巾の下着。金巾のばけものだ。姉はおとなしく着せられたが、私は大いに気に入らなかつた。方々引つ張つてみたり、たぐめてみたりしたが、着心地はさらによくならず、しまいにはじれて泣きだし、一旦着たものを脱いで振りたくつておこつた。おばあさんは弟の着物を着せていたが呆れたらしく、「一度しか云わないからよくお聞き」と云つた。ぴりつとした。「折角お父さんが揃えてくださつたものを、いやならいやでいいから、我を張り通すなら立派におやり。親のお葬式に子供は是非行かなくつちやならないんだから、裸で行けるものなら行つといで。」閉口した。二度の手間をかけて着せてもらつた着物は、ぐざぐざだつた。帯はゆるすぎて、からだは中で自由にねじることができた。かたく締めると瓢箪腹になつて、からだの為によくないのだとおばあさんが云うから、気持が悪いなどとは云えなかつた。

お棺へ釘を打つた。私は一しよう懸命に、こつこつと力を入れて叩いた。父は、「もうよしよし」と云つた。玄関の畳の上から藁草履を履かされた。気に入らない物ばかりだ。姉と二人、そこのたたきの処で待つように云われた。間もなく赤い坊さんを先頭にして、いろいろな坊主が続いて出て行つた。父が出て来た。滑りの悪い藁草履は白足袋にからんで裏返しにひつくりかえり、誰かがはつと身を伏せて介添した。そ

のとき私は邪慳に肩をこづかれ、香炉を渡され、「落すんじやないのよ」とけわしく云いつけられた。父が下りて来て、姉と私の背に手を置いて、「まつすぐ向いてしやんとして歩くんだよ」と云つた。一緒に行つてくれるのかと思つたら、一人でずんずん行つてしまつた。編笠を持つていたようにもおもう。敷石の両側には花がずつと並んでいた。俥は何台も続いていたし、編笠徒立の人もいた。行列はのろのろと土手へ向つて進みはじめ、乞食が声をあげて寄つた。俥には幌をかけず、川風はつめたかつた。

お寺には、もつと大勢の人が広間に集つていた。出された菓子にも手を触れず、私は不機嫌でいた。色の白い小肥りの女の人が来て、父に挨拶をした。一束につかねて黒い笄のようなものでとめ、眉の剃りあとが太く青かつた。一人かしこまつている私を見て、なつかしそうに、「文子さん」と云つた。綺麗な人だつた。水晶の数珠も綺麗だつた。帯のあいだから紫のたとうを出し、あけると片側に鏡がついている。櫛を出して髪を梳いてくれ、櫛のあたりは柔かかつた。「これじや帯があんまりだらしないから、あつちで直してあげましよ。」衝立の蔭で襟もとは固く合わされ、胸高にしやんと締められた帯は快かつた。いつまでもこの人のそばにいたかつたが、いつの間にか離れてしまつた。一度も会つたことのない人だつた。ぽつてりと豊かな胸や膝のやさしさが、母に似ていた。その後、お寺へは度々連れて行かれる運命になつていたが、ふたたびこの人を見ない。

忘れがたい幻像を懐いて人に云うこともせず二十三歳、弟の葬式のときに父に、「あれは誰ですか」と訊いた。父は怪訝な顔をして、「誰だかわからない」と答えた。たしかにお父さんはおこいさんと呼んで話していたと云うと、一層腑に落ちない顔を向けてまじめに考えていたが、二三日して、「おまえがそれほどにも子供心に身にしみた人だから、どうかして思い出してやりたくてあれこれ思いつづけたが、まるきり記憶がない。おれがもうろくしたのかも知れないから、お延ちやんやオバ公に訊いて御覧」と気の毒げにことわりを云つた。こんなに事こまかに覚えている私だのに、あの時あんなに気易げに話していた父だのに。じわじわと心がひきしまつた。気が済まなくなつて、わざわざお延叔母さんもお久伯母さんもたずねたが、二人ともびつくりした顔つきでぼんやり、「わからない」と口を揃えた。母の葬式を知る誰に訊いても知らなかつた。私は穏かでない気持になつた。「人の世には夢があるものさ、笑つて済ましちまえ。そういう妙なことは決して追うもんじやないよ」と父は私をあわれがつた。そして、「おまえはなあ」と云いさし、私はあとのことばに身構えたが、「ま、もういい」といなされてしまつた。障子の桟を見つめている父の顔は、淵のようであつた。のちに私は、おまえはなあのあと何を、いささか読めたようにおもつている。

*

母は中背、やや肥り肉。すました顔つきの写真を見てよく人は、一葉女史に似ているという。柳田さんの露伴伝を見ると、ほん太に似た美人のように田村松魚氏が云つていると出ている。父は、一葉さんとは全然似ていなかつたとも、また美人という類いではなかつたとも云つている。義兄妹と一緒に写した、不断の顔をしている母はぼん太とは似もつかない、なかなかきかない顔をしている。私は七ツでまだ母の顔を鑑定することはできなかつたから、記憶に残るものは笑顔の眼尻ぐらいなものである。延子叔母はウィーンにいて兄の結婚の報を受け、嫂の写真を受取つた。叔母の師事していた某先生はその写真を見て、「これは西洋人から見れば美しい顔とは云いがたいけれども、こんなにシンメトリックな顔をもつた人は内容的な美をもつていはしないかと思われる」と云つたそうである。これは昭和二十年、疎開に際して雑物整理をしたときに、ベルリン以来手筥の底にあつた私の母の写真を改めて私にくれて、してくれた話である。

もたもたした気象ではなくて、しごとがきびきびと手早かつたらしいことは、延子・幸子両叔母その他の親類達も云う。殊に御飯ごしらえは臨機応変、敏速に楽々とこなしていたものと思える。その頃の寺島は閑雅ではあるけれど便利ではなかつた。父の話によると、炭取と火消

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

し壺は母が大事な財産だと云つていたという。一刻も早く火を得るために、経済のために、火の用心のために、そして料理に即応するために、あらいおき、こまかい焚落し、炭火を消すための、というようにいくつもの火消し壺があつたという。炭取も粉炭の、堅炭の、土竈炭のというように種類があつて、整理していたという。棚には薬味類と季節季節のつまや取合せにつかわるべきものが常備されていた。たとえば蓼・三ツ葉・紫蘇・生姜・茗荷等というものは、母の小さい畑の貴重品であつたらしい。農婦ではないから麦をとりいれ芋を収めることはないけれど、こまごまとそれからそれへと間断なく土地を利用していたのであろう。乾物類は時化のときのためにいつも貯蓄補給されているし、移り変りのものに時をはずすことはなかつた。父の進歩性が母を教育したのだろうと思うが、当時すでにレタスを蒔き、タンを煮、オリーヴ油をつかつている。父はレタスをラッチュースと発音する。昭和生れの孫は五歳のときにこれを聞いて、「おじいちやま、レタスというのよ」と祖父に頭を掻かせた。母も長命したらきつと、マイヨネットソースなんて云わなくてもマヨネーズでいいのよ、なんて云われたこととおもう。

父は料亭で食事を摂つて来ることが度々である。その頃は夫妻同伴でそういう処へ行くことはないから、母はいつも留守番で、眼新しいおいしいものは話にだけ味うのであるが、二三日のうちにはそれはほぼ原品に近い出来栄で膳に載せられた。「どういうようにしてこしらえた」と訊くと、笑つて、「なんでもありませんでした」と答えたそうである。日本料理なら手の込んだ寄せものも工夫のいる摺りあわせものも、どうやらこうやらやりもしたろうが、たべたことも見たこともない西洋料理のソースやドレッシングの類を、どうしてこしらえたろうか。「西洋料理はつまるところ、上へかけるものの料理ですか」と質問され、父はそのさときことにあわれをさえ催したと話す。私はそんなにも専念して父に膳を献つたことはない。それは愛なのであろうか、それとも義務としたのであろうか、それともしてできないことはないという天狗の鼻なのだろうか、いずれにせよ母だからもあるが、そのひたすらな気持に心をうたれる。

母の嫁入仕度は粗末なものであつたらしい。普通の家庭では縮緬やお召は不断着にしないし、こういう絹織物の生命は長いものである。継母の来たとき私は改めて云われた。「私はあんたのおつかさんのものは何一ツ散らさずに、あんたの嫁入のときまで保存しておいてあげようとおもつて来たが、着物はおろか裁ち余り裂一ッ端さえなく、箪笥長持の類も何一ツない。私がどうかしたんじやないから大きくなつて何か云わないように、そのことはしつかり覚えていてもらいたい」と云つて、納戸・押入等一々明けて見せられた。針箱が一ツあつたきり。変な気がして父に云うと、「なぜそんなことを云う」といぶかしげに訊き、「おまえはそういうものが欲しいか」と云つた。首を振つた。「そんならその話は大きくなつてからわかるようになる」と云つたが、やがて着物の欲しい盛りの私に、「おまえの母さんはわたしの着古しばかりを着ていた。それはいくらじみな世の中にしてもあまりくすみ過ぎていたけれど、着物は着る人によるものだ。着こなしていた」とも云い、また、「私の婚礼は極質素で、それがまた分相応であつた。おまえの母さんの仕度も平凡な並一ト通りのものだつた」と笑つた。オバ公さんは私の結婚を祝いに来たときに訊きもしないのに、ふと、「文ちゃんおつかさんのものが懐しくはないかい。私はお八代さんが来るについて暇を貰つて帰るときに、あなたのおつかさんのものを櫛・笄までそつくり頂いて帰つたから、形見は残つているよ」と云つた。私は父の心を察した。父の日記に見えている。母は、わが新衣を購わんより君が書物をと云つたと。夫と子供と消し炭と薬味を財産に思つてすごした十七年の、まつくろけな姿。柳の緑、菜種の黄、蝶の白を以てこの黒衣の人に配すれば、かつと明るい春日の絵のぬきさしならぬしめくくりでもある、じみが不幸であつたとは誰が云えよう。

父は、「わたしはお幾美が死んで後に、いかに女達が不平不満ばかり多くて頼み甲斐ないものかを知つた」と云つている。また、「それにくらべると随分お幾美に勝手わがままをふるまい、赦し少き扱いをしたかに責められる」と云

つている。また私に縁の話があつたときには、「芸術の世界に身を置く人はなるべく避けたい。心凝れば妻子は無きに同じく、心遊べば己れを養うに忙しい。妻子を愛してしかも遠く疎々しい芸の人に嫁がせて、母子二代の泣きを見るに忍びない。わたしはお幾美に決して優しい夫でなかつた」と云つている。口も手も人並以上な姑を頂き、いずれも一ト癖ある兄や妹と横につらなり、夫はといえば、今うららかな花の園にいるかとすれば忽ち湧き起る黒雲に大雨到るありさま、稲妻がたに走る機嫌のとりにくさ。好んでしばられた縁ゆえ、どこへも身のかずけ処はなし、誘うものはひたひたと寄せる大川の潮であつたそうな。これは母とは相嫁同士の、私にも縁のつながる人の話、また下女のおもとが伝えたと継母からも聞いた。

母の死は結核であつたらしい。のちに継母は正当な衛生思想から、「あんたのおつかさんの一まきは肺病だから」と、食器は勿論、洗面器まで自分用のは別にしていたくらいだから、肺にちがいない。父は七十八十の年になつても、「おまえの母さんはインフルエンザで亡くなつた」と云いきつていた。

母の亡いあとの家事は、おばあさんとオバ公さんとが交替で泊り込んでしてくれた。おばあさんは外出がちの叔母さんの家政にことよせて、だんだん遠のき、ただ時々見廻りに来た。オバ公は不平たらたらながら、三人の子に取巻かれて逃げることもならなかつたらしい。野育ちということばは、しばしばおばあさんから発せられ、面と対つて云われると父は返辞もしないで、黙々と庭へ立つて行つたりしたのを知つている。オバ公さんはやはり黙つていたが、蔭では、「自分にも孫じゃないか、文句を云うより来てかわいがつてやりやいいじゃないか」と毒づいた。

父はおばあさんを尊敬して礼儀を崩さなかつたが、それは構えてつとめてする風であつた。遠慮している証拠は、はしばしに見えていた。おばあさんも亦、父には一目置いて遠慮していたという話である。他の子供、つまり叔父達に対するのとは違つていた。「鉄四郎の本を読むところを見ていれば、あの頭が一ト通りでないことがわかる」と私達にも云い聞かせていたくらいで、子の偉さをちやんと知つていた。したがつて、よその家庭に見るような、子は親を多少時勢後れ的に扱い、親は子に馴れ頼つている、いわば睦みあつているという風景は、うちには皆無であつた。おばあさんは一生、母の貫禄を保つていた人である。

オバ公さんは当時独り者であつた。嫁いで男の子を一人産み、かわい盛りのその子に死なれた打撃で、主人は気がぼうつとしてしまつたので離婚した、という経歴であるそうな。母が幸田家へ嫁して来るときに同時にもう一ツの縁談を受けていたそうで、それは商人だつたというが、生活に苦労はあつたにしても将来成すあらんとするところの方がいいと、親きょうだいの意見に反して進んで来たのだ。オバ公さんは、ばかだと罵り、小説書きなんぞ何があてになる、縁切りだと申し渡し、結婚式当日の島田を結つてやるとうしろへ廻つて、毛筋を母の頭へ突きさしたので、ながらく往き来はなかつたという話を、私は父から聞いて驚いた。私には母方にもすさまじい血が流れているのである。

こういうおばあさんとオバ公さんの二人が、主婦のいない家庭の、気むずかしい主人を中心にして、責任のあるような無いような態度で出たりはいつたりする一方、召使のおもとは母の下では規格にはまつてちやんちやん働いていたのが、埒が外れては本来のだらしなさをさらけ出して、買物にはつけかけをする、仕事には無精をする、こつそりと図々しく樽の飲み口はひねるというわけで、気の休まるひまはなかつたと、これも父の口から聞いた話である。

でみず

秋、隅田川は氾濫した。私と弟は一度寐入つたところを揺り起され、馴染の俥屋に送られ、小石川伝通院脇の延子叔母の家へ預けられた。弟子達の稽古と音楽会とに引まのない叔母の家事は、おばあさんがうけもつてしていた。おじいさんは別に浜町に家を持つて別居していた。

蝸牛庵からくらべると庭は狭かつた。威厳あるおばあさんの監督下に遊び場処もなく鬱屈し

た二人の子供は、日に一度与えられるお八ツのお菓子が唯一のよろこびであつた。アルファベットのビスケットには花文字にだけお砂糖が塗つてあつた。ドロップはトランプのクラブやハートの形に打ちぬいてあつた。生れてはじめてよそのうちへ預けられた経験は、母の死とともに早くも遠慮と敵意をもちはじめた私へ更に、どうしても諦めてしまわなければならない服従の重圧があることを教えた。毎日、私はちよこまかしてはおばあさんの抑制にあつてしおれ、そのたびに縁側に腰かけて足をぶらぶらとふり動かしながら、空を見つめた。空に恋しいわが家を描くことは容易であつた。のちに私は子供をもつて、その子が空に眼をやることに気づいたときにはぞつとした。母なる私はここにいる、父なる夫はそこにいる。寒くなく乏しくない、この子の空に見る幻影は何だろう。二十年まえの母の思いを無心のこのおさな児は感得して、空に見つめるまぼろしは或は向嶋蝸牛庵の庭であり、若かりし祖父の姿ではなかろうか。私は子の熟視をそらせて、間近の玩具、手ぢかの味覚に引き戻すために、あわてふためいた。それほどにもこのときの家恋うおもいは私に沁みて、ふとした子のまなざしにかくも不健康なおもいを閃かせて汗をしぼつた。弟は小さかつたからおばあさんの抑制もさほどききめがなく、それに長男をたつとぶ風習は相当色濃く浮き出ていたから、いたずらも失敗も大目にゆるされた。けれども、かぶつきりの洟つたれでも三ツ違えば姉は姉として扱われ、風当りは私に強かつた。ひがみである。二日三日と過ぎて行くうちに、私はおばあさんに云われる先へ先へとくぐり抜け、縁側に空を見つめることを多くした。

おばあさんは銭湯へ連れて行つた。大勢が裸でいるのを見て私は非常にはしやいだ心になつたが、「女の子がお臍もまる出しにしてべろんとつつ立つているとは何というざまだ」と云われて一時に恥かしく、おまけにあの人もこの人もみんな裸のくせによそ行きの三枚がさねでも着ているときと同じようなきどりかたで、見馴れない私についておばあさんに訊いた。おばあさんは、「これは親の無い子で野育ちでして」と云い、私は衆人環視のなかで捉えられて、耳のうしろと背中をひつこすられた。そして、足の裏を洗うさまが醜いと云つてたしなめられた。からだを洗うなどという一些事は、毎日の流れのうちにおのずからにして親から子へ受け渡される筈の、ことさらならぬものであるらしい。私は女学校時代にそれとなく訊いてみた。友達は、からだを洗う「躾」に特別な記憶などをもつているものはいないようであつた。母がいないばかりに「躾」という枷を私は感謝なく受取らねばならなかつた。母親がいないということは私の罪の結果ではない。にもかかわらず、あたかも罪あるものが事毎に怯えに噛まれるように、つまらぬことまでが次々に思いがけなく逆目立つて来て、恥とうらみのとげを植えた。いまは戦争で親のない子がどこにも溢れているという。両親も頼る処もない浮浪児等のことは、あまりに心が痛くて考えてみることもならないが、まがりなりにも片親と、家というものの形式をのこして生活している程度の多くの子供のことをおもうと同情を禁じ得ない。無気力なものと気がさなものと、いずれに鞭は痛いか知らないが、歯を剝くような児を見ると私は、腹の底から浪立つように興奮を感ずる。しつかりやれ親無しつ子！　ジャンダークはおまえ等の心のなかにいる。

叔母さんの処へは綺麗な女の子達がお稽古に来た。しずかな物腰と優美なことばとは、田舎育ちの私にとつて驚くべき妙な子供達に映つた。おばあさんは、「この人達を見習え」と云つた。私の相手というものはなかつたから、早速くりくりした眼の女中に対つて、遊ばせをやつた。女中は身をねじくつて笑い、「恐入ります」と云つたが、おばあさんは、「ばかめが」と云つた。私は台処と三畳をしきりする柱を撫でたり、爪の痕をつけたりして我慢した。いやだと思つた。

そんなにしているうちに、ある夕方、お父さんがやつて来た。あわてて風呂が焚きつけられ、すでに叔母の稽古の終るのを待つばかりに仕度された食卓は急に模様替えになつて、子供達だけがさきに食事をさせられた。弟は父の膝から離れず、私も父の肥つた脇腹へへばりついていた。弟は寝入つてしまつたが、私は連れて帰つてもらいたい一心で強情を張り通して寝床へ行

かず、簞笥にもたれていた。はつと覚めると、父は荒い声でどなつていた。手をつけぬ食卓をはさんで父と向きあつたおばあさんは、醜くゆがんだ顔で鉄瓶に片手をかけながら、なにか傲然と云つた。父はすつと立つた。「お暇いたします」と云つた。おばあさんは口早にまた何か云つた。食卓は音を立てて散乱した。私は台処へ逃げた。格子のリンが鳴つた。つまずきながら暗い玄関のたたきへはだしで飛下りたときに、消えぎえのリンの余韻のなかを小砂利を踏んで遠ざかるものは、まさしく父、文子の父の足音であつた。

その後どんなにしてわが家へ帰つて来たのかは記憶にない。見れば、立木にも羽目にも壁にも泥水のあとが一線を引いていた。庭も畑も一トべたに皮が剝けていた。そのずるずるの庭に立つて父は、木から木へ細引を張つて書物を干していた。雨戸を外してその上にも濡れた本が散らしてあつた。石の上にも垣根の竹にも本が載つていた。日課のようにして本の出し入れを手つだつた。本はいやな臭いがしてい、洋本はことにも気味悪くクロースがふくれめくれ、実にたまらない臭いを発していた。黒い黴が生えて腐つてしまつたのもあつた。夜になると、父は晩酌の膳に対つているのにあぐらの膝に落水本を置いて、丁寧に象牙の箸様のものではがしつつ、読みつつ飲みつつした。そして低声に吟じ、やがて朗々と吟じた。私はそのうすら寂しい、そしてなにか知らず刺すようなところのある調子を聞くのが嫌いだつたから、それがはじまると仏壇のある部屋へ行つて、弟の隣へ寝た。一ト眠りして覚めると家の中も庭の外もひつそりと静まつて、ただ父ばかりがいよいよ興に入つて吟じていることが度々であつた。そしてなにか心惹かれる、嫌いな調子を聞きながら再び寐入るのであつた。この時分から私はよくうなされたり寐ぼけたりして、下女やオバ公さんに厄介をかけるようになつた。

ずつと後に父は私にいたましい微笑を浮べながら、こういうことばを以て話した。「洪水はおれにひどい我慢をさせやがつた」と。はつと思う間に棚が落ちて、長年の蒐集や丹精の書抜が一時に汚水に浸し、さてしみじみと紙と墨によることのはかなさと記憶の貴さを知つたという。ノートブックはいらないものだという説は尤もなのである。このときの本は皆のちに新陳代謝したが、そんなにひどくならなかつた群書類従の何冊かが戦火にあうまで残つていた。あとからもつと読み易い群書類従が度々出版され、自分も幾通りも持つているくせに、端本の水害本を手放さないでいた気持を思いやると、悲しさが汲める。

洪水はもう一ツ、父に食いこむような思いをさせている。お雛様である。歌子のためにこれだけは残してやりたいと、特に高い処へ骨折つて載せておいたが、思いのほかの大洪水になつて物皆が一時に浮きあがつて一時にひつくり返つたのだそうである。毀れた箱からいざなわれて潮のまにまに風のまにまに、或はうつぶせに或はさかさまに漂い流れる人形。やがて皆姿を消して、水の引いたあとには無惨な！　首のないむくろが、あつちに一ツこつちに一ツ、人の形をしたものの怖さ、自然の暴威のおそましき。父は酔余感情を発してこの話を聞かせた。私は悽惨の気にうち負かされ、いまだにこの情景をおもうと嫌悪をすら感じる。

おばあさん

父は生れだちからひ弱で、たびたび死ぬようにひきつけたそうである。ときは上野の戦争、住いは黒門町だつたから、短時間のうちに立退かねばならない騒動になつている。そのなかで父は息も絶えだえに、眼をひつくりかえしてしまつている。「これを思うと知らざることとは云いながら、大大変のさなかにおつかさんに苦慮をおかけ申し、実におれというやつは生得不孝の罪浅からざる中しわけなきやつで、おつかさんの御恩は洪大だ」と、時には感じて涙すら浮べて云うのである。あんまり度々聴かされたので抑揚までおぼえている。そして結びには、弱即悪という論は成立つという事になる。弱即悪なら、世のなかの弱いやつはみんな死んじまえばせめて悪の蔓延は防げるだろうと云うと、「きさまごときがむやみに口を出せる境涯か」と憤慨し、「第一ことばを出して人に不快を与える、自らの業の穴を深くして苦しむ大馬鹿

者」と来る。晩年父も私も非常に穏かに話していた或ときに、「文子は口業が深いのですか」と訊いたら、「そうだ、まことに気の毒だ」と云つた。そのあとで、「おまえのみに限らず女は大抵そうだ」とわずかに慰めらしく云つてくれた。気の毒とはおかしな返辞だとおもつたが、日を経るにつれて、これは針のごとくわが心にささつて利いている。気の毒である。

父のいくつのときの話だろう。寒くて手がこごえそうでたまらないので、脇明きから両手を胸に入れて温めていたという。男の子の着物は普通四ツ身から脇明きをつけない、脇の明いているのは附け紐を通すからで、附け紐を用いる男の子は極小さい子に限るものである。おばあさんはこれを見て、「なぜそんなざまをしている」と云つた。「寒い」と答えた。母は小さい子を浮き柱の前へ連れて行つた。「手を出してここへぶつけてみなさい、火が出て温かになる」と教えた。――「おれは以来懐手をしなかつた」と聞く。

おばあさんは能筆である。十二歳のときに書いたというものを見ると、自分達の十二歳時にくらべてちょつと驚く。無論お手本があつたのだろうが、まるで大人の字のようである。父曰く、「おつかさんの字は口を明いていないのさ」と。又曰く、「根性でも手でもたしかなのさ」と。世態も人の意も違つたんだろうけれど、それにしても十二で口を明いていず、徹してたしかなんぞという児に会つちゃ溜息が出る。おばあさんの字は誰に習つたのか、私は知らない。書体も何というべきか知らない。

うちでは毎年書きぞめをさせられる。父は人に頼まれた色紙や短冊を書くのではない、ほんとの手習いをする。子供はそのあとで書かせられる。学校の手本からは全然離れて、そのときに題を出されて書く。筆や紙は父のを使わせてもらう。そのときは竹林清石とやつたと思う。唐紙二ツ切りへあふれるような字を書いた。「すこし大き過ぎたな」と笑われた。翌日、下女に送られて紀尾井町へ行き年賀を述べる。子供も新年は一人前に扱われお盃を頂く。それから書きぞめを出してお辞儀をすると、おばあさんが鴨居にかけて見てくれる。独眼竜で見る。中気でぴくぴく引つ吊れる眼が、ものをよく見ようとする時には余計痙攣して独眼竜になる。「よろしい」と云われて先ず無事通過、一晩泊ると父が迎えに来た。「鉄ちゃんは文子の字を見てやつてますか。」幼名鉄四郎だからこう呼ばれるのである。「すこしばかげてはいるけれど、見どころがあるかも知れないから何かお手本をおやんなさい。こうも大きな字は指図をしても書けないものです。」父はかしこまつてお辞儀をしてあやまつている。私は、あれつと思つた。家へ帰るとすぐ拓本をくれて、「これを習え」と云われた。智永の千字文だつた。天地玄黄宇宙洪荒と、いやな字がしょつぱなから並んでいる。私のばかでかい字が父をあやまらせたと思えば痛快だが、因果はめぐり来つて習字となつては、まことにあまり楽しくない。手本を見て一人で勉強したが、金出麗水あたりでおけらの水渡りになつた。なまけてやらないので、父は機嫌をとるつもりで大きな硯をくれたが、買収されなかつた。硯より木登りの方がおもしろいからである。とうとう父は、「千字文はしなくてもいいから、せめて永字八法だけはやれ」と厳命し、今度はそばについているから、なまけるわけに行かなくなつた。

さて、やりだすとだんだんに註文が多くなつて、しまいには、「第一おまえはからだの構えがいけない」と云つて、筆の持ちようからやり直しである。文字はさておき、棒も引けないというので、棒引の稽古をする。新聞紙の上から下までまつすぐに引く。どんどんやつた。しばらくすると、貸してくれた筆のさきが台なしに切れたが、いたしかた無い、その禿筆で永字へ取つ組んだ。印々泥錐画沙と教えられた。遂に、「ああ、おまえは火つきの悪い子だ」と云つた。私も大体いや気がさしているのだから、双方でいつとなくよした。それつきり私は習字に見切りをつけている。のちに予楽院だとか松花堂だとかの仮名の写真版をくれたりして、「気に入らないか」と云つたが、私は活字の方がいいとおもつていた。「野蛮な女だ」と云い、「おまえの字は風の吹き去る糞の如きものだ」と評し、「まあ文字なんぞどうでもいいけれど、名前ぐらいは人並にやつてもらいたい」と嘆息した。そうかと思うと、「秀吉は大こうと仮名で名を

書いたくらいだ」とも云つて教える。文子の名、即ち亡に又と教えたのは父である。いまさらに何ぞ筆墨の煩を労せんやと予楽院も行成卿も埃まみれにした罰は、のちに痛くも知らされた。恋文を書く段になつて、私はすくなからず当惑したのである。おばあさんは見込違いをしたわけである。

*

父は、「おつかさんの手には閉口する」などとよく云つていた。おばあさんの手は、たなごころが割合に広く厚い。指はやや骨太、やつとこでなくては切れないほど厚い竪長の爪がしつかりかぶさつていたと記憶する。へらの代りにしるしのつくほど厚い爪である。握力は強く、指一本一本に力がある。筆も三味線も雑巾も針もわけへだてない。かりそめの手遊びの折紙なども、おばあさんのは細工方でよく云う線がぴつと立つている、あれである。手拭は水の中で搾れるものだという。握力などは練習でどんどん増大するものだということを習つた。雑巾がけなどは大抵の人のを見ていると、埃と一緒にずらずら撫でくつているんだから、うすつ気味の悪いやりかただということである。

私は女学校低学年のとき、通学距離が遠いので日の短いあいだしばらくをおばあさんの処に置いていただいた。普通の学校の裁縫は一学期に一枚或は二枚を仕上げれば、それでよい時間割になつている。ところがおばあさんは、私が二カ月も三カ月も同じ物をまごまごいじつているのが驚きであつたらしい。——裁縫は二タ通りにする。不断着は拙速で事足り、いいものは入念に時間をかける。不断着は清潔第一とするからしばしば交替せねばならぬ、しばしば着かえるには手入れは敏速にせねばならぬ、敏速の実を挙げるためには拙はまた已むを得ない、一寸三針五分一針結構という。そのかわり、いいもの、男物はそうは行かない。男はよそで衣服を脱ぐ場合もままある、脱いだ衣服の始末は必ず他家の子女の手にかかる。また特にいい着物を着て出る場合は、同座する者もまたきつと綺羅を張つている、即ち品評会である。ものがよければよいだけに、粗相粗雑な針目は目に立つて恥辱この上もないのだから、入念精美を要する。それにはたつぷりと時間をかけるべきだ、と。馬鹿丁寧な仕立かたをした不断着の垢づいているのは愚であり、いい着物の俄仕立も内証が見えすいて未熟だというのが論である。そこで、私は専ら拙速を奉じることにし、いいものは手に負えないから業とする人に賃をかずけて負わせようと云つたら、おばあさんにやにや、「わたしはおまえに縮緬ぐらいは不断着だという大奥様になつてもらいたいと思つているんだがね、そんな時にどんつく布子なら縫います、柔かものは縫いませんといつて、襦袢まで人に縫わせるんじやちつと不便だろ。雷様の女房になつちやそれでも勝手が違うけれど、お雛様だつてたかが金襴だ、織物の数は大抵きまつてるんだから裁縫も知れたものさ。けちなこと云つてないで何でも縫つてごらん。」敗北した私は父にこの話をした。「なに、おつかさんなら虎の皮くらい恐れるもんか」と笑つて、「おれはなぜ女が糊の研究をしないか不思議でしかたがない。水に耐えることと剝脱を自由にすることと布を損じないこととを考えればいいんだから、そんなにむずかしいしごとではないと思うがね。糊とアイロンで着物が処理できれば女の時間はずつと救える」と云つた。拙速よりまた一段といい話だから賛成したら、「どうだい、おまえやらないか。」全くうつかりしていると、始終なぐられてばかりいなくてはならない。

おばあさんの動植物に対する態度で父に訊いたことがある。なにか音楽会でもあつたのか叔母は紋附を着て、花束を抱いて帰つて来た。それは私などにははじめての蘭の巨大華麗な花だつた。二ツに分けて一ツはピアノの上へ、一ツは茶の間に置かれた。朝食のあと、おやつの時、おばあさんはこの花を長いことぐつと見ている。父とは親子だからさもあるべきだが、瓜二ツと云いたい眼つきである。達磨様のように上瞼は一線に引かれ、下瞼だけが弧を描いている。多少たるんだ上瞼は眼玉で押上げられているようなかたちである。ただ見るというのではない、見抜く眼の据えかたである。「花品の上なるものではない」と云つた。父は、「恐らくそれはあたつているものかも知れない。おつかさんは西洋蘭の知識なぞおもちなさらないのだから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com